

## 「満州国」における日本人の西洋音楽の足跡

高 橋 裕 子

### はじめに

今日の日本の西洋音楽は西欧諸国に劣らないほど進んでいるが、日本の西洋音楽受容の歴史はさほど古いものではなかった。西洋音楽を吸収し始めたのは明治からで、その開花期は大正であったという<sup>1</sup>。1854年のペリー来日による日本の開国が日本の西洋音楽の受容を促したことは言うまでもないが、日本は西洋音楽の教育を重視し、積極的にそのための組織づくりと教育に取りくんでいった。文部省によって1879年に「音楽取調掛」が設立され、伝習生を受け入れ、西洋音楽を伝達し、日本の中小学校でのカリキュラムの作成にも貢献した。東京芸術大学の前身である東京音楽大学は、音楽取調掛を拡充して1887(明治20)年に設立された。日本の音楽教育の中心をなした官立専門学校である<sup>2</sup>。有名な音楽家幸田延や滝廉太郎などもここで音楽研究に従事した。日本の音楽は緻密なシステムのもと急速な発展を遂げた。

日本人によって建設された「満州国」は13年あまり存在し、その時期、日本人によって行われた西洋音楽の実践は中国近代音楽史上、重要な位置を占める。「満州国」で日本人が西洋音楽を伝え繁栄させたことは、中国東北地方に元来根付いている音楽や芸能とまったく異なった、全く新しい音楽形式の手本を率先して提示した。ただ、「満州国」で伝達しようとした西洋音楽は、日本国内のような飛躍的な発展はなかった。

一方、中国の伝統音楽や東北に存する民間芸能などは、京劇を除いてその

ほとんどが衰退するに至った。西洋音楽の受容によって、自国の伝統音楽が比較的粗末に扱われることは日本と変わらなかった。東洋音楽研究家の田辺尚雄<sup>3</sup>は「西洋音楽の知識ばかりで、中国の音楽についてほとんど知らない」中国音楽家蕭友梅と会い、「音楽家として、また学者として高位を占める士であるのに、自国の古楽を知らないこと、・・・あえて中国だけでなく、日本でもこれと同様ではなかろうか」<sup>4</sup>と嘆いている。

本論文は「満州国」での日本人による西洋音楽の活動や伝達状況と「満州国国歌」成立の経緯を軸に論じることを目的とする。

## 第一章 西洋音楽の伝来

### 1. 中国東北地方について

中国東北地方とは具体的には、北から黒竜江・吉林・遼寧の3省のことを指す。この地は古来、多くの少数民族が住み着き、様々な民族の盛衰が繰り返されたが、大きく分けると、東部はツングース系民族（満州族もその一種である）、西部はモンゴル系民族、南部は漢民族という構図である<sup>5</sup>。現在も漢族、朝鮮族、満州族、イスラム族、モンゴル族やツボ族（ツングース系民族の一種、清朝の新疆討伐軍の子弟）などの多くの少数民族がこの地に共存している。かつて12世紀に金朝を建てた女真族の後裔の満州族が東北を統一し、1636年ヌルハチの子ホンタイジ（皇太極）が皇帝の位につき、国号を清に改めた。1644年瀋陽から中国本土の北京に王朝を移し、中国を支配した<sup>6</sup>。広々として豊富な自然資源に恵まれているが、厳しい自然環境におかれているこの地に、清朝成立前後、山海関内から大量の移民（漢民族）が移り住むようになった。東北に清朝政府は軍隊を置き、人民の自由な東北地方への移住を禁じ、「封禁の地」としたが、山東や河北あたりの破産農民が新しい住処を探しに山海関を渡ったり、軍人や左遷された役人や犯罪者などが多く東北に住み着き、農地を開墾した。

19世紀半ば以後、中国の言い方では「半植民地半封建社会」、すなわち清朝

という封建的政府が帝国主義諸国の侵略のもと、植民地になりつつあるという状況が出現した。ロシアは満州へ南下し、東支鉄道を敷設する契約を1896年に清朝と結んだが、日露戦争後、鉄道を部分的に日本へ譲渡したことによって、日本人による「南満州鉄道株式会社」の経営が始まった。鉄道の敷設は農業生産を増大させ、仕事を求める多くの漢族が関内から満州に渡った。1898年の人口は約500万人であったが、1915（大正4）年には2000万人、30年には3000万人と急激に人口は増加した<sup>7</sup>。漢民族の割合が大きくなり、満州族やモンゴル族の方は少数民族となった。

東北地方の歴史背景は中国東北の音楽にも大きく影響を与えた。東北3省の1つ、遼寧省は東北地方と山海関以南の内陸をつなぐ位置にあって、内陸の音楽芸能などはここから東北地方に移住や労働のためにきた人々とともに東北地方に根付いていった。つまり、東北地方の古来の音楽と内陸から伝わってきた漢民族の音楽の出会いはこの東北の南部に生じたと言える。これに対し、東北地方の北部はロシア音楽の影響が大きく、南部と異なった音楽状況があった。本論文は、のち「満州国」の首都となる新京や大連など日本人の影響を受けた東北中南部を中心に見ていきたいと思う。

では、東北古来の少数民族音楽と漢民族が東北に伝えた伝統音楽にはどのようなものがあるのだろうか。清朝期の満州民族歌舞は祭日や祝典などで演奏されることが多く、満州族の人々は病気の回復や家族の平安を祈るためにもしばしば歌や音楽を奏でた。説唱芸能として、「八角鼓」「子弟書」「倒喇」「辺関調」がある。さらに、モンゴル族音楽の「好来宝」「馬上琵琶」などが挙げられる。清朝政府は東北地区、特に吉林省長白山付近を「龍興之地」「祖宗肇跡興王之所」（発祥の地）とし、民族音楽にある宗教的な意味合いを重視し、民族的な習慣や特色を守ろうとした<sup>8</sup>。

関内から漢民族が満州に移住し、19世紀半ばに、「蓮花落」「秧歌」などの漢民族音楽が様々な形で東北地方に伝わってきた。田植え歌である「秧歌」は清朝初期から、廟会で盛大に演じられ、東北に根を下ろすことになった。「蓮花落」は、もともと乞食が門づけの時に歌う歌曲である。清の嘉慶年間（1760—1820）、1つのストーリーを歌って、戯曲に類似する要素を持つよう

になり、内容的に複雑になった。二人転はこの2つの芸能に最も影響され、形成された。二人転の曲牌は300—400ほどあり、曲目は300以上ある。二人転の音楽には、東北の人々が親しんでいる音楽が用いられ、そしてせりふも即興性に富んでいるなどの特徴がある。特に農民に愛好されており<sup>9</sup>、今日、東北地方の代表的な芸能としてよく知られている。

東北地方に京劇・評劇が伝わってきたのは、19世紀後半である。この頃、牛子厚<sup>10</sup>という吉林の富豪が「健康楽茶園」を建てたことが、京劇などの芝居の普及に役立った。清朝の後期になると、廟宇の舞台、茶館や劇場が所狭しと建てられて、吉林・長春・公主嶺など大都市だけで百か所を超えた。京劇や評劇の盛んだった様子がうかがえる。

京劇や評劇の演出場所は大都市だったが、二人転や秧歌など民間小型芸能は奥地や辺鄙な農村で上演することが多かった。そして、日露戦争後、日本人が東北地方に住み着き、東北地方の中国人にはかつて聞いたこともないような音楽の響き、西洋音楽を奏でるようになった。

## 2. 満鉄と満鉄音楽会

日露戦争を経て、日本による満州の植民地経営が始まり、日本人が数多く満州に移住した。満鉄音楽会は「満州国」が成立するほぼ10年前に、満鉄社員によって組織された正式な音楽団体であった。満鉄音楽会は、1922（大正11）年2月11日の紀元節に大連で創立された、満州北部の哈爾濱を除けば満州で最初の西洋音楽団体であった<sup>11</sup>。哈爾濱の付近ではロシアの影響が強いため、西洋音楽はすでに盛況を呈していた。

満鉄音楽会はどのような性質をもった団体で、のちの「満州国」での日本人による「王道楽土」の建設との関わりはどのようなものだったのか。まず満鉄から道筋をたどる必要があるだろうか。

満鉄は「南満州鉄道株式会社」の略称で、1906（明治39）年11月に創立され、日本の国策会社として満州での鉄道の権益を拡大させていった。当時の満鉄の状況については、塚瀬進の『満州国「民族協和」の実像』にこう記さ

れている。「日露戦争(1904—05)後、日本は関東州の租借権、満鉄の経営権、満鉄警備の軍隊の駐留権などを獲得した。こうした満州権益の獲得に伴い、多数の日本人が満州に乗り込んできた。とはいえ、日本人の大半は関東州と満鉄付属地に住み、満鉄の関係者か、それに群がるサービス業者・小売商がほとんどであった。関東州や満鉄付属地では都市整備が進められ、日本と同様の生活を送ることが目指された。」

関東州と鉄道付属地の守備に務める2個師団の部隊は、後に巨大化し、関東軍の前身となった。日本人は満鉄を中心に満州での支配を拡大し、日本人の満州在住者の数もどんどん膨らんでいった。満州での日本人居住地の拡大は日本政府にとって切実な問題だったが、満州における鉄道の所有権の拡大に伴って、日本人占領地は急速に増大した。日本人は奉天(今日の瀋陽)や大連などの大都市を確保し、そこで日本人街を築いていった。日本人の増加につれて西洋音楽が満州で奏でられるようになった。1908(明治41)年、大連で西本派本願寺の布教使福田行誠が大連幼稚園内でバイオリン、ピアノ、オルガン、チェロを教えた<sup>12</sup>。演奏会も開き、『満州日々新聞』(1909年12月13日)にその演奏会に関する記事が記載されている。演奏会の幼稚さを指摘しながらも、これからの発展を期待することが述べられている<sup>13</sup>。

1921(大正10)年頃には、満州にいる日本人は5万人近くに増えた。満州在住の日本人たちは、新しい土地で日本と同様な生活を追及した。音楽や芸能などを通じて、望郷の念を紛らわせようと満鉄音楽会のような組織をつくる発想に至ったのは必然であった。

この満州音楽会に関しては1925(大正14)年から1943(昭和18)年までの『満州年鑑』で詳しく知ることができ、その大正14年版には満鉄音楽会について以下のように記述されている。

大正11年の紀元節に孤孤の声を挙げた満鉄音楽会は順次系統的に発達したが現在(大正13年9月)会員数は500余名を算している。この中、洋楽練習部員150名、邦楽練習部員58名である。講師はバイオリン 高津 敏・ゲオルゲスコ・堀 正己・坂野金右衛門、ピアノ 園山民平・東海林久子、

チェロ 林 顕蔵, 声楽 東海林久子, マンドリン 金子 旭・近藤良太郎・篠原喜一・大野忠芳, 琴古流尺八 足立秀風, 上田流尺八 山田芙笙, 宝生流謡曲 片桐発作, 観世流謡曲 岩村薩馬・国政興三郎の諸氏である。

満鉄音楽会は大正11年にすでに成立し、洋楽と邦楽と2つの分野に分かれていたが、邦楽の方は「やや押され気味である」と『満州年鑑』（大正12年）に記されている。大連音楽の重鎮として、村岡樂童・園山民平・高津 敏が名を馳せ、この時期の満州の西洋音楽を語るには欠くことのできない存在である。（3に詳述）。

満鉄音楽会関係者が携わる音楽団体は後に多く出現した。1924（大正13）年に園山民平が大連音楽練習所を、田岡信夫や高津 敏などと力を合わせて組織し、大連幼稚園を音楽練習場とした。練習会員は約百数名に上った。ごく少数の例外を除いて、楽員は日本人によって構成された。1928（昭和3）年、大連音楽練習所を大連音楽学校に改称し、より本格的な音楽教育を行った。その他、24年に満鉄経営大連ヤマトホテルにヤマトホテル管弦楽団が結成され、村岡樂童が楽長となって、9名ほどの楽員による演奏会が毎晩のように催された。

24（大正13）年に、大連での西洋音楽のコンサートは16回行われたが、満鉄関係者による音楽会がそのほとんどであった。満鉄音楽会定期演奏会が举行され、満鉄に招かれた世界的バイオリニスト、ジンバリストが独奏会を開き、満州の音楽を賑わした。25（大正14）年11月までは練習部員が満鉄社員に限られていた満鉄音楽会が、その後、一般の参加希望者も入会できるようになった。

満州での日本人音楽団体は年毎に数が増加する傾向にあった。25（大正14）年には主な音楽団体はわずか4つだったが、次の年の昭和元年になると、若葉ハーモニカソサイテイーと金星マンドリン倶楽部、それに合唱を楽しむ会が結成され、7つの団体となった。若葉ハーモニカソサイテイーは満鉄社内のハーモニカ愛好者によって組織され、金星マンドリンもまた元満鉄音楽会の楽員だった金子 旭が教授に当たっている。そして合唱を楽しむ会はその

名の通り、満鉄関係者の妻子が合唱を学ぶ集まりであり、村岡樂童が指導を行った。26（昭和元）年は、大正天皇崩御による諒闇のため演奏会はほとんど行われておらず、27年から満州音楽界は少しずつにぎわいをみせた。10月28日に第11回満鉄音楽会演奏会が協和会館で行われ、引き続いて30日に藤原義江独奏会が挙行され、満州の音楽愛好者を楽しませた。

29（昭和4）年になって、山田耕筰が組織した日本交響楽協会が大連で支部を結成し、日本国内外の優秀な音楽者を満州に紹介するような事務的なことを取り扱っていた。レオ・シロタというユダヤ人ピアニストが28年、極東ロシアの演奏旅行の際、ハルビンで演奏したことがきっかけとなり、日本交響楽協会大連支部が斡旋して、シロタが大連に寄って、演奏会を開き、見事な成功を収めた。その後、彼は日本にわたり、東京音楽学校の教授を務めて、46年まで日本で暮らした。

29年には、9つの音楽団体が満州で活動を行うようになった。満州には日本の音楽家たちはしばしば訪ね、音楽会を開いて「欣欣しい現象」を呈した。具体的には藤原義江、柳 兼子、永井郁子や松井芳野里が音楽会を開き、そしてジムバリスト、スピルマンなど白系ロシア音楽家によるバイオリン演奏会が行われた。満鉄の管轄下に西洋音楽は比較的に良好な環境に恵まれていた<sup>14</sup>。

以上満州国建国前の音楽状況を、満鉄音楽会を中心に概観した。日本政府は満州を植民地にするためにその尖兵としての役割を満鉄に託した。そうした満鉄の経営や各活動は別にして、西洋音楽を本格的に中国東北の中南部に持ち込み、当時東北の中国人にとって、かつて聴いたこともない旋律を耳にするきっかけを作ったのは、満鉄を中心とした日本人であった。しかし、満鉄音楽会で行った音楽活動は満鉄関係者の娯楽の一環であって、中国で西洋音楽の伝達に努める意識があったわけではなかったことは指摘しなければならない。

## 3. 満州にきた日本人音楽関係者

西洋音楽は東北に住む中国人の間ではまだ知られておらず、中国の西洋音楽家もほとんどおらず、そして、西洋音楽を演奏する場所も皆無に等しかった。渡満した日本人には、音楽を演奏したり、聞いたりする場所や音楽教育をうける場所も少なかった。満州の日本人人口が急増する中、音楽を求める日本人もますます多くなった。このような状況は、音楽家にとって満州で音楽の才能を生かす格好の機会だったと言える。以下、満州で音楽才能を生かして、活躍をし音楽家たちを見ていくことにする。

園山民平は1887（明治20）年9月に島根県に生まれ、東京音楽学校で楽器や作曲を専門的に学んだ<sup>15</sup>。卒業後、母校で教鞭をとる傍ら、宮崎高女でも教え、1922（大正11）年ごろに大連へ渡り、南満州教科書編集委員兼関東庁音楽視学を務めた。満鉄音楽会の会員で、同会員の高津 敏・山岡信夫などと協力し、大連音楽練習所を作った。そこで西洋楽器を教え、評判が良かったので、練習所を拡大して、26（大正15）年に大連音楽学校を建て、園山がこの私立音楽学校の校長になり、高津 敏・増田信子・山岡信夫・藤山喜三郎・新村 武・大谷よしこの7名を講師にして熱心に音楽を教授した。園山はとくに音楽教育に心血を注いだ。満州の最初の音楽教科書である『満州中等唱歌』を編集して、大連音楽学校で出版し、満州の中等音楽教育の空白を埋めた。満州民謡の研究にも乗りだし、300数集の満州民謡の収集をした。満州を題材に創作した歌は「満州小唄」「満民謡集」「満唱歌集」がある。終始大連音楽を支えてきた音楽家だった。

大連音楽学校で園山民平と共に音楽教育に励んだ高津 敏は満鉄音楽会楽長兼鉄道総局厚生課職員で、さらに奉天満鉄交響音楽団楽長も兼ねていた。1886（明治19）年6月に神戸で生まれて、陸軍戸山学校軍楽隊で音楽教育を受け、1903（明治36）年に同校を卒業した。コルネットの名手として知られている。東京音楽学校のオーケストラのメンバーでもあった<sup>16</sup>。陸軍軍楽長予備役に編入した後、1923（大正12）年に満鉄に就職した。のち、「満州国」建国後も満鉄の音楽の権威的存在であり続けた。

村岡祥太郎（雅号、楽童）は1881（明治14）年、東京に生まれ、1901（明治34）年に東京音楽学校を卒業し、天津で音楽教師をしていたが、大連の小学校の講堂でバイオリンの独奏会を開いたのがきっかけで、14（大正3）年、関東庁学務課の嘱託に任命され、大連に移住し満州音楽会の重鎮となった。15年12月に満鉄の嘱託により、満鉄ヤマトホテル管弦楽団が設立され、村岡は団長を務め、メンバー6名ほどを率いて、毎晩ヤマトホテルで演奏を行った。『満蒙』などの雑誌で多くの作品を発表し、特に大正13、14年にはほぼ毎月のように村岡が作曲した童謡などが掲載された。

以上3名の音楽家はのち満州国国歌の制作にも参加した。彼らをはじめ、多くの日本人音楽家が満鉄の保護の下、充実した音楽活動を展開した。音楽関係者たちは自由な雰囲気の中、気ままに才能を生かすことができた。しかし、のち大連でのこのような活発な音楽活動は「自由主義的なものの残滓」と言われ、それに対し、「満州国」の首都新京で成立した新京音楽団が、インテリ層が求める政府のための音楽、すなわち「全体主義的なもの」であり、それこそが真の音楽だと讃える現象が起こった<sup>17</sup>。

## 第二章 「満州国」国歌について

### 1. 「大満州国国歌」と「満州国国歌」

国歌は、他国に対して自国の独立性を示すことと国の内部的結束を強化する機能がある<sup>18</sup>。「満州国」政府は、未だ国際的に認められておらず、また多民族が存する「満州国」をコントロールするために、国歌の制作は特に入念に行われた。

「満州国」国歌は「満州国」が成立してから消滅するまで13年5ヶ月あまりの間に3種類も制作された経緯は、岩野裕一の『王道樂土の交響楽』に詳しいので、それを参照しつつ概略を述べる。建国とともに最初の国歌「大満州国国歌」が誕生した。この曲は、1932（昭和7）年3月1日の建国から数ヶ月遅れで、この年の夏に完成した。しかし、そのことは日本国内の朝日新聞

では報じられたが、「満州国」内では一切公表されなかったという不思議な事態が生じた。この国歌の作詞を担当したのは「満州国」国務総理大臣の鄭孝胥で、作曲は山田耕筰だった。鄭孝胥は文人としても知られ、歌詞は以下のようなものであった。

地闢兮天開  
 松之涯兮白之隈  
 我伸大義兮繩於祖武  
 我行博愛兮懷於九垓  
 善守国兮以仁  
 不善守兮以兵  
 天不愛道地不愛宝  
 貨惡其於地兮獻諸蒼昊  
 孰非横目之民兮視此洪造

日本語訳 （武藤富男の『私と満州国』による）

地は闢け、天は開く  
 松（松花江）のほとり、白（長白山）のくま  
 我は大義をのべて、祖武に縄る（祖先の大業を引く継ぐ）  
 我は博愛を行うて、九垓を懐く（広い土地をおさめる）  
 善く国を守るは仁を以てし  
 善く守らざるは兵を以てす  
 天は道を愛まず 地は宝を愛まず  
 貨は地に棄つるを惡み、之を青天にささぐ  
 いずれか横目の民にして（人として）この洪造を視ざるものあらん

山田耕筰は周知のように、日本作曲界の草分け的な人物であるが、一方鄭孝胥<sup>19</sup>はどうか。「満州国」は、三権分立の形式で国務院（行政）、法院（司法）、監察院が設置され、国務院は政治の中枢であった。溥儀に誠心誠意に仕え、再び王朝大臣になる夢を持っていた鄭孝胥は、国務総理大臣という最高のポ

ストを与えられたが、それは名実相伴うものではなかった。形式的に書類に署名するだけの仕事で、国務院会議で一言も発言することはできなかったという。実際の行政権は日本人にあった。1934（昭和9）年、「満州国」の建国2年後、執政溥儀が皇帝になり、帝政が形の上で再び実行されたが、鄭孝胥が望んでいた清朝の復辟は関東軍に否定され、鄭孝胥の夢は粉碎された。鄭孝胥は帝政1周年記念日でその不満を次のように述べている。

「満州国」は抱かれたる小児の如し。今手を放してこれを歩行せしめんと欲す。・・・然るに児を抱く者、もしいたずらに長くこれを抱かんか児ついに自立の日なし。・・・ここに至りて我「満州国」の未だよく立つあたわざるの状、日本政府あえて手を放して立たしめざるの状況、これ今日自明の所ならん<sup>20</sup>。

昭和10年5月21日に鄭孝胥は罷免された。在籍期間は3年あまりだった。在任中、2回の国歌作詞を行い、それが在任中の最も大きな仕事となった。この国歌が「満州国」で採用されなかった理由として、この歌詞に秘めた意味が日本人の考える「満州国」のあり方と矛盾する箇所があることをまず指摘することができる。歌詞の第3句に、「我伸大義兮繩於祖武」とあるが、これは我々のなによりも大事な務めは祖先の事業を継ぐことだと、清朝政府の再起を祈る気持ちをはっきりと示したものである。そして、第4句と第5句の博愛や仁でもって、国を治める旨は儒教的な思想を顕わにしている。次の句で軍事を用いて国を守ることは良い政策ではないと述べているのも、日本人には聞き苦しいであろう。一方、旋律の方も国歌として採用されなかった原因であると考えられる。この曲の拍子は8分の3で始まり、途中で8分の6、8分の9に転調し、さらに8分の3に戻るという3拍子で全曲を貫いている。3拍子はリズムカルなワルツや舞曲によく使われる旋律である。日本では1900年以後、3拍子を緩慢なテンポで演奏する。感傷的なワルツがしばしば作曲されているが、志気を奮わせ、尊厳を高める国歌には3拍子の旋律を用いるのは適切ではない。「大満州国国歌」はこうして1度も演奏されることな

く消滅した。そして、「満州国」建国の祭典には間に合わなかったものの、第2の国歌「満州国国歌」は、「満州国」建国1周年後の1933（昭和8）年2月4日に改めて公布された。

天地内有了新満州      新満州便是新天地  
頂天立地無苦無憂      造成我国家只有親愛並無怨仇  
人民三千万人民三千万      縱加十倍也得自由  
重仁義尚礼讓      使我身修  
家已治国已然治      此外何求  
近之則与世界同化      遠之則与天地同流

日本語訳 （武藤富男の『私と満州国』による）

天地の内に新満州あり。新満州これ則ち新天地。  
天を頂き地に立ち苦なく憂えなし。  
わが国家を造成するや、ただ親愛あって決して怨仇なし。  
人民三千万、人民三千万、たとえ十倍を加うるもなお自由を得。  
仁義を重んじ礼讓を尚び、わが身を修む。  
家すでに治まり、国すでに治まる。このほか何を求めんや。  
これを近うしては世界と同化し、  
これを遠くしては天地を同流する。

この国歌が発表された当時は、作詞は鄭孝胥で、作曲は無記名だった。実際のところ、作曲は高津 敏、園山民平、村岡樂童という「満州国」の西洋音楽を象徴する3人によるものだった<sup>21</sup>。鄭孝胥は歌詞の中で「仁義礼讓」を讃え、「世界同化、天地同流」のような目出度い言葉で結んでおり、「大満州国国歌」に比べれば、より平易なものに作り上げた。彼は中国人による作曲を希望していたが、結果的に日本人によって作曲が行われた。中国語に合う旋律にするために、作曲者たちは満州族の人の意見を広く求め、中国の民謡の旋律を取り入れて、中国の曲にかなり近い旋律に仕上げた。この国歌は10

年間、しばしば満州に住む日本人に日本国国歌と一緒に歌われたため、当時の日本人の記憶に最も強く残った。

## 2. 3 番目の「満州国」国歌

2 番目の「満州国国歌」には儒教的意味合いが強く、「満州国」が日本の「友邦」であることが表現されておらず、そして「天地内有了新満州」で始まるところにも、清朝政府によつての復辟を願う鄭孝胥の国家観の影響が強いといった理由で、「満州国」建国10年目に第3の国歌に取って代わった。10歳になった「満州国」は日本の支配が明白になり、日本の天皇制を強調するような内容の国歌が必要になってきたと考えられる。第3の国歌は1942(昭和16)年6月24日に発布された。この新しい国歌の制作過程は以前の国歌に比べれば、かなり緻密であった。

41(昭和15)年9月3日、鄭孝胥のあとを承けて國務總理大臣を務めた張景恵が、國務院訓令でもって国歌制定を命じた。10月22日に国歌制定委員会を創設し、張國務總理が会長、武部六蔵総務長官と三宅光治協和会中央本部長が副会長を務めた。起草委員会委員長は武藤富男が任命された。作曲に関しては、園山民平・高津 敏・大塚 淳のほか、「満州国」楽壇の重鎮たち、そして山田耕筰・小松耕輔・信時 潔・橋本国彦の4名を日本楽音楽顧問として迎え、「作曲委員会」を構成した。また「日文歌詞起草委員会」と「満文歌詞起草委員会」の2つの委員会を組織し、日本語と中国語でそれぞれの作詞が行われ、最終的に日文の歌詞と中文の歌詞を斉唱できるように作り上げることを目指した<sup>22</sup>。国歌の内容は次のようである。

おほみひかり	あめつちにみち
帝徳は	たかくたふとし
とよさかの	万寿ことほぎ
あまつみわざ	あふぎまつらむ

## (中国文の歌詞)

神光開宇宙      表裏山河壯皇猷  
 帝徳之隆      巍巍蕩蕩莫與儔  
 永受天祐兮      萬壽無疆薄海謳  
 仰賛天業兮      輝煌日月俦

(岩野裕一の『王道樂土の交響樂』による)

この新しい国歌は日本が欧米から学び取った西洋音楽のリズムを用い、2番目の国歌のように中国の歌曲の旋律が入り交じった曲ではなかった。「おほみひかり」や「帝徳」などの言葉で、日本の天皇と「満州国」の皇帝を讃えあげるといふ旨を主としている。この歌詞には日本の天皇のことを冒頭に置くことによって、「満州国」皇帝の溥儀が傀儡であり、東北地方は日本の一部であることを強調しているように思われる。この国歌も、3年後の日本の敗戦による「満州国」の消滅と共に姿を消した。

### 第三章 「満州国」建国後の西洋音楽

#### 1. 新京音楽院の誕生

前二章で「満州国」建国前の日本人による音楽活動と「満州国」の国歌について述べたので、この章では「満州国」建国後の東北地方の西洋音楽事情を述べたいと思う。「満州国」は、新京(今日の吉林省長春市)に首都を置いた。当時、南満州では大連と奉天が大都市としての発展を遂げ、日本人も多く住んでいた。しかし、「満州国」政府は新京に首都を置くことに強く拘った。かつて満州族が東北地方を統一したとき、奉天に都を建て、そこには、王宮も残されているので、このような満州族の名残を日本人は良しとしなかった。さらに、奉天には張作霖一族と関わりを持っていた者が多く、その残党に混乱させられることも恐れていた<sup>23</sup>。それと比べて新京は、東北の中心に位置し地理的にも有利だったので、「満州国」政府要地として置かれたのである。そして音楽の中心も大連から新京に移る形になった。昭和14年の『満州年鑑』

には以下のようにある。

ここ数年来続々世界楽壇大家の入満演奏会に接した満州音楽会は折柄、音楽が生活化した時潮と共に潮く前進し満州音楽面も少しづつ社会的に活躍を始めたが、事変下再び消極的になって演奏会も減少しすべて軍歌軍国調の旋律に終わった。一方皇軍慰問行の大小音楽家達の入満は盛んだが結局往来するのみで在満州好楽家にも満州音楽家群にも大した収穫は得られなかった。この間僅かに新京音楽協会が生まれて続々よいメンバーを養成し支離滅裂の満州音楽界に総合的に前進行動する音楽運動の前鞭を着けた。

この年の音楽会記録を見ても、「皇軍慰問音楽会」「愛国精神強調のための演奏」「愛国独奏会」などの題目が目立っている。不景気な大連音楽界に対し、発展し繁栄を呈した新京音楽協会はどんな組織だったのであろうか。

新京音楽協会は、1937（昭和12）年10月に発足した「満州国」の南における本格的な音楽団体である。それは、新京で一流の音楽隊を組織しようと当時の国務院人事処事務官の和泉徳一（妻初音は東京音楽学校本科卒業、新京音楽界の中心的存在であった）が提案し、ヤマトホテルでの音楽協会結成会議を経て、誕生したのである。新京市公署と協和会の管轄下に入り、さらに新京特別市副市長関室悌蔵の援護を得て、まず楽団の増員から始められた。そして、10月12日に満州国や満鉄、満州電電などの国策会社の社員、さらに一般市民によって「新京交響管弦楽団」が結成された。建国以来、皇帝溥儀のためにつくられた宮内府の楽隊、関東軍や満州国軍の軍楽隊があったが、「新京交響管弦楽団」のような一般市民も対象とした大規模なプロオーケストラが成立した意義は大きいと思う。

新京音楽協会の成立の背景には、市公署と協和会などの斡旋があった。37年8月に創設された「株式会社満州映画協会」（満映）の理事長を務める甘粕正彦<sup>24</sup>が、新京音楽協会の常務理事も務めた。軍国主義者で、大杉 栄らの虐殺事件で知られている彼は、協和会総務部長であった。11月20日に協和会中

央本部委嘱のもとで、新京音楽協会の指導者に東京音楽学校の前教授大塚淳が就任した。大塚は新京における音楽界の中核的存在になり、43年まで新京の音楽全体の指導者であり続けた。前に述べたように、新京交響管弦楽団の楽員は国策会社の社員や一般市民などによって構成するが、さらに日本内地から12名ほど招き、「悉く各官庁その他に勤務し激務を採り、夜はオーケストラの練習にも出ねばならぬといふ多忙さである」<sup>25</sup>という状況だった。しかし「(楽人たちに) 多くの俸給を支払うと云う程の経済力を欠けているので、自然アマチュアも参加し」、技術上も問題が多かった。新京交響管弦楽団は2回の定期演奏会を挙行了たものの、第3回の定期演奏会は人材不足のため、オーケストラによる演奏は1曲のみで、その他は合唱や独奏でプログラムを組まなければならなかった。

新京音楽協会を「行く行くは満州楽界の中央統一機関とする積もり」<sup>26</sup>という考えのもと、2年後の1939年4月1日、新京音楽協会を構成する一部分であった交響楽団を改組し、新京特別市と協和会が補助金として20万元を支出して、市立新京音楽院が成立した。この音楽院の構成や活動をよく伝えるのが『満州国現勢 康德6年』である。

市立とし、初代院長は大塚 淳 氏。新満州音楽の確立及び近代音楽の普及を大目的とし、その実践団体として附属交響管弦楽団・混声合唱団・吹奏楽団の三を持つ他、巡回演奏隊の派遣・臨時音楽教員養成所の新設・レコード吹き込み・放送を行ひ、研究機関としては同院内に音楽教育研究室・楽器研究室・声楽研究室・郷土音楽研究室・作曲研究室の五室を設置することとなっている。

新京音楽院は中国人や朝鮮人も採用した。当時東北唯一の中国人作曲家で、バイオリン奏者の陳其芬のほか、朝鮮人2人を音楽院に参加させたのである。「真に民族協和団体としての大交響楽団を編成」することに心がけていたようだが、日本内地から募集した楽員も含めて日本人をさらに14人も採用した。それに比して他民族楽員がわずか3人だったことは、「五族協和」と言えるだ

ろうか。

新京交響管弦楽団成立以後、多くの演奏会が行われた。そのプログラムに日本人作曲家の作品がほとんど毎回のように含まれていることに注目したい。新京交響管弦楽団の第1回演奏会は37年12月22日に行われ、新京音楽協会の委嘱を受けた作曲家・清瀬保二が交響曲「黎明（合唱付き組曲）」を制作し、新京記念公会堂で演奏された。この交響曲は「戦場」「平和」「建設」「一徳一心」と4章によって構成され、「東亜の黎明」を意味しているが、この曲名は新京特別市副市長の関室悌蔵によって付けられている。40年3月、新京交響管弦楽団が改組し、名を新京音楽院管弦楽部に改めた。それを記念して、「満州国」国内で演奏旅行を挙行した。紀元2600年（1940年）を慶祝するため、39年11月新京音楽院が交響楽作品を公募した。作曲家高木東六の組曲「朝鮮幻想」が選出作品の一つとして選ばれ、定期演奏会で作曲者本人の指揮で演奏された。

3年後の1943年は「満州国」建国10年にあたるが、新京音楽院は新京特別市の管轄下から脱し、財団法人の組織として再び改組された。その建国10周年記念演奏会でも小貫與四郎の組曲「建国10周年を迎えて 大満州」が上演され、さらに翌年5月28日の第2次演奏会で市川都志春の大満州国祝典組曲「暁雲」が演出された<sup>27</sup>。

新京で日本人の作品をしばしば上演することで、作曲家たちにとって、「満州国」は音楽の新天地となった。戦争の嵐が迫っていることにまったく気づかぬまま、多くの有名音楽家が「満州国」での音楽活動に期待を寄せて集まるようになった。そして「芸文指導要綱」の発布によって、「満州国」の音楽はさらに大きな変化を見せた。

## 2. 「芸文指導要綱」の作成

1941年12月8日、太平洋戦争が始まった。同じ年、日本国内には戦争に協力する目的で日本音楽文化協会が誕生した。その目的は、それまでにあった楽壇の各団体を1つの協会に総合し、音楽界を「一元化」ということだっ

た。大政翼賛会文化部員松尾要治が政府を代表して、音楽会に一元化の要求を示した。「一元化とは、他の部門同様、ボタン1つを押せば、その部門が直ちに動員できる様な仕組みになってほしいのが、眼目なのである。」<sup>28</sup>ということであった。

日本国内のこのような動向と時期を同じくして、満州国では40年末から41年にかけて行政機構の大幅な改革が行われた。41年3月23日に国務院総務庁弘報処によって「芸文指導要綱」が發布された。総務庁弘報処とはいわゆる「国家的情報宣伝機関」である。武藤富男<sup>29</sup>はその処長を務め、また芸文指導要綱の発案者でもあった。「芸文」という言葉に関して、武藤は「『芸文の花咲乱れ、思いの潮涌きめぐる』という一高寮歌があったので、その後を満州国に持ってきたわけである。」と述べており、その意味は芸文指導要綱の1条で述べられた。それは、政治、経済から道德、芸術、宗教など広範な意味を持つ文化という概念から美術、音楽、演芸、映画、写真などを抽出し芸文とすることであった。

この要綱が実行されることによって、新京の文化全般的に変化が現れた。41年7月5日に「満州劇団協会」(委員長：上原 篤，事務局長：藤川研一)が設立され、8月10日「満州楽団協会」(委員長：大塚 淳)，17日に「満州美術家協会」という具合に続々と設立された。関東軍などの「満州国」統制機関が強い権限を握っていたからこそ、「満州国」でこのような大改革を容易に実行し得たわけである。各協会は文芸の各分野において公的活動を要求され、「聖戦完遂と国防国家建設の任務についた、すさまじい動員の状況」<sup>30</sup>が見られた。

満州楽団協会では、甘粕正彦が理事長、大塚 淳ほか5人が理事を務めた。戦時色一色に染められた財団法人新京音楽院が発足し、しばらくの間は、盛況を呈した。42年「満州国」建国10周年の際、山田耕筰が指揮を務め、宮内省楽部、東京音楽学校管弦楽部、新交響楽団、中央交響楽団、星桜吹奏楽団、東京放送管弦楽団、日本放送交響楽団から選出された40余名の楽員によって構成された前例を見ない大規模オーケストラが、9月21日に新京記念公会堂で演奏会を挙行し、建国を慶祝した。このすべてを計画したのは甘粕正彦で、

満映と新京音楽団の理事長をかねる彼は映画、音楽、美術などの部門の権限を一手に収めて、「満州国の文化水準向上のため取り込んで」<sup>31</sup>いた。

## 終わり

「満州国」においては、純粋な芸術の発展と普及を求める雰囲気は稀薄で、「王朝政治」、「民族協和」といったスローガンを訴えるために音楽を利用するという気運は一貫して変わらなかった。音楽家を自由に創作させ、優れた作品を生み出させるような環境を「満州国」政府や音楽指導者たちは作り上げようとしたかもしれないが、しかしそこにはやはり国家の支援のもとでの、国家に奉仕するための音楽といった制限があった。座談会「満州文化の歴史と構造」での高橋源一の発言はそのことを如実に示している。

結局満州の文化といふものは、ほんたうの民間文化、下から湧いてくるものを培養して、ほんたうにそれを育てて行くには、第二次五か年計画……が非常に成功して、戦争でも、治って金の使い道がなくなったときでなければ、今のやうに建設で追はれ追はれて高度国防国家建設をやっているうちは、いわゆる国家目的に即応する文化といふものは、ある程度は発達するかも知れないけれども、いわゆる純粋文化といふやうなものは何かなかなか発達しないと思ふんですがね。<sup>32</sup>

作曲家 八木 伝<sup>33</sup>は昭和19年9月に財団法人新京音楽団の委託を受け、作曲家として渡満、放送局や満映などでの作曲に務めた人物である。彼は「満州国」での音楽活動を通じて作った作品は「すべて死滅作品だった」と言っていた。

戦後、「満州国」政府のために作られた曲のほとんどが作曲家自身によって消去され、再び演奏されることはなかった。「満州国」で植民政策という政治的意図とそれを実践する音楽家たちの芸術的欲求に基づく音楽活動の推進は、相互に補完しあうというよりは相反発しあう。結果として両者の力が相

殺され、満州における日本人の音楽活動は大きな成果には結実しなかったと言わざるを得ない。

満州国で、日本人が行った演奏会などの音楽活動は中国人に対する啓蒙を目的としたわけではなく、あくまで日本人のためのものであり、その享受者は日本人や少数の中国人に限られていた。しかし、それまで西洋音楽との接点のなかった中国東北地方において、はじめて相当の質と量の西洋音楽が奏でられたことは事実であり、その機会に西洋音楽に触れた中国人が後年、東北地方で西洋音楽の指導に携わるなど、結果論的にはそれなりの教育的効果があった。西洋音楽が東北地方へ伝播してゆくきっかけとなった点において、日本人の音楽活動は、東北音楽史上にその意義を認めうる。

本論では、満州国時代を中心に、東北地方における日本人による西洋音楽事情を概観したが、戦後の展開には説き及ぶに至らなかった。この点については今後の課題としたい。また、日本の植民地行政の一環としての音楽活動に関しては、台湾など他の植民地との共通点と差異を明らかにする必要がある。そのことについては、いずれ稿をあらためて論じたい。

## 注

- 1 齊藤 龍『横浜・大正・洋楽ロマン』
- 2 音楽之友社『日本の作曲20世紀』
- 3 田辺尚雄, 1883-1984, 大正・昭和時代の音楽学者。日本及び東洋音楽を専攻し、特に東洋音楽研究では開拓者的存在。
- 4 田辺尚雄『中国・朝鮮音楽調査紀行』
- 5 塚瀬 進『満州国「民族協和」の実像』
- 6 日立デジタル平凡社『世界大百科事典』
- 7 塚瀬 進『満州国「民族協和」の実像』
- 8 『中国戯曲誌』吉林卷
- 9 王肯ら『東北俗文化史』
- 10 牛子厚, 1863-1925, 喜連成科班の班長。音楽、戯曲の愛好家。
- 11 『満州年鑑』大正15年
- 12 中溝新一「育まれた満州音楽界」, 『満蒙』1924年4月号
- 13 「本願寺音楽部の演奏会は雪がちらつく十一日午後七時より高砂倶楽部に開かれ外国人も二三人は見受けた十もある曲目のうちで、琴の二曲とピアノの連弾が

聞かれた、合唱はバスもテノールの声が低くて、終始楽器に敗けている、感服しなかった(中略)それから曲目に少しもクラシクのものが選ばれていないのはどうしたものか、聞いているても甘物沢山で、どうも感服が出来なかった、ベートベンでも、モーツアルトでも、バッハでも善い、成丈次回の時にはこういうものから選んで頂きたい。」

- 14 『満州年鑑』 昭和4年
- 15 富檻康『日本の作曲家』
- 16 田辺尚雄『中国・朝鮮音楽調査紀行』
- 17 網代栄三「大陸に於ける文化国策の第一線に立たんと志す人々へ」、『音楽年鑑』1938年6月号
- 18 日立デジタル平凡社『世界大百科大事典』
- 19 鄭孝胥, 1860年福建省に生まれ, 科挙の試験に及第, 外交官となり渡日, 神戸領事を勤め, 帰国後, 地方官を歴任, 辛亥革命以後は商務印書館を経営, 清朝滅亡後, 清室内務府弁事処に出仕, 宣統帝の復位に務め, 1931年宣統帝に供奉して渡満。優れた学者, 詩人で書をよくした。1943死亡
- 20 山室信一『キメラ』
- 21 木村遼次「『満州国』国歌創作之謎」、『偽満文化』
- 22 岩野裕一『王道楽土の交響楽』
- 23 太平洋戦争研究会『満州帝国』
- 24 甘粕正彦, 1891年仙台市生れ。21年憲兵大尉となる。関東大震災の混乱に乗じてアナーキスト大杉 栄らを殺害し, 軍法会議で懲役10年の判決をうける(甘粕事件)。26年仮出所し, フランスに渡る。29年帰国後大川周明の手引きで満州に渡り, 満州事変に際し裏面で関東軍に協力, のち満州国民政部警務司長, 協和会中央本部総務部長, 満州映画協会理事長などを歴任。敗戦直後の45年8月20日長春(当時は新京)で自決。
- 25 大塚 淳「新京に於ける新しい音楽運動」、『音楽年鑑』1938年6月号
- 26 網代栄三「満州国における音楽」、『音楽年鑑』1938年10月号
- 27 岩野裕一『王道楽土の交響楽』
- 28 音楽之友社『日本の作曲20世紀』
- 29 武藤富男, 1904年静岡県生まれ, 東京大学法科卒, 34年4月満州国司法部事務官として満州に赴任, 39年3月総務庁弘報處處長。
- 30 岡田英樹「満州国文芸の諸相」, 『「満州国」の研究』
- 31 角田房子『甘粕大尉』
- 32 座談会「満州文化の歴史と構造」における高橋源一の発言, 『満州建国側面史』, 『王道楽土の交響楽』から孫引き。
- 33 八木 伝, 明治41年生まれ, 陸軍戸山学校を昭和7年に卒業後, 日本大学芸術科で作曲等を学んだ。(『日本の作曲家』による)